

訪問日：2017.7.27 / エリア：横浜市

NPO法人 カブカブ



回答者 鈴木 励滋さん (カブカブ所長)

活動の経緯、地域との関係について

作業所を始めて20年になります。喫茶が中心ですが、仕事にメンバーを適応させるのではなく、それぞれのやりたいことをいかに仕事にするかを心掛けています。喫茶の他には、お菓子を作る人がいたり、絵を描く人がいたり、洋裁をする人がいたり、リサイクル品の仕分けをする人もいます。

カブカブのある団地は、高齢化率が40%を超えるようなところ。なので、地元の人たちとの関係ができる前に言葉だけを発信すると、都会からの注目は集まるかもしれませんが、地域で浮いてしまうと思いました。まずは地域の一員となることを目指して、近所の方たちと仲良くなるために、周りの人が面白がってくれるように、理屈を言葉で伝えるのではなく、日頃の実践や身振りとして表すようにしてきました。

カブカブでは、どんな人でも歓迎するというのがテーマですが、ただ開いていれば来てくれるというものでもありません。そういう意味では、2003年にひかりが丘地域ケアプラザ内に喫茶コーナーができたのは大きかったです。ケアプラザは福祉の拠点として住民に知られているから、そこで「商店街の中にもあったのね」と気づいてくれて、来てくれるようになったお客さんもいました。商店街の代表とか地域の福祉関係者として地域の会議にも出ることが、地域のいろいろな方たちと知り合うきっかけにもなりました。

今では、近所の方がクリニックの帰りに寄ってくれたり、知り合いを呼び止めてここを語らいの場として使ってもらえたり、さっき喫茶から出た人が道で知り合いに会ってまた戻ってきてくれたり、近所の方たちにご利用いただいています。

喫茶のご利用で貯められるポイントカードがあるんですが、みなさんすぐ失くしてしまうので、お名前を書いてお店でお預かりしています。それをきっかけにお名前を伺えるので、スタッフに

はお客さんの名前を覚えて欲しいと願っています。そうして名前では呼んでいないと、お客さんの方も、名前でもメンバーのことを呼んでくれるようになりました。

カブカブで取り組んでいる課題

いろんな「はたらく」のカタチを模索しています。例えばあるメンバーは、その辺にいつも横になっていて「ガー」とか声を出していますが、彼女がいないと「今日はどうしたの」と気にかけてくれるお客さんもいます。そのお客さんにとっては、彼女に会うというのも喫茶カブカブを味わうことのひとつ。ということは、「いる」ということで場の空気を作り、関わりを作り出しているのは彼女の接客です。彼女はここに存在するというご給料をもらっていい、というのがカブカブの考え方で。

メンバーと新しいお客さんとの間でずれ違いがあるなというときは、スタッフがメンバーのことを一言、二言説明したり、合いの手を入れたりすることで、そこに関係が生まれるようにします。他所では矯正されてしまうようなことでも、それぞれの味のある接客なのだと言い張り、メンバーが思う存分にパフォーマンスをしてもらえるように、彼や彼女をどう見せられるかがスタッフの腕の見せどころだと思っています。お客さんがメンバーのことをもっと知りたくなるように。そして常連さんになればなるほど、カブカブメンバー一人ひとりとの多様なやり取りを楽しめるようになります。そうして「障害者」や「高齢者」という一般名詞ではなく、名前を持った人同士の関係ができていきます。

新しく来たスタッフが、メンバーの自由な様子を見て、「あの人が働いていないんですけど、大丈夫ですか？」なんて言うときもあります。いわゆる働く、こうでないといけないみたいなことが染み付いていて、そういうふうになってしまうのだと思います。そういう際にも、理屈で説明するというより、メンバーの展示などの機会に同行してもらって、普段何をやっているのか分からな

1997年に地域作業所として旭区内に開所。翌年に現在のひかりが丘団地商店街に移り、喫茶コーナーの営業を開始。ひかりが丘ケアプラザ内にも喫茶コーナー、同じ商店街内に工房カブカブ(アトリエ・製菓スペース)を持つ。法人としては他にカブカブ竹山(緑区)、カブカブ川和(都筑区)といった事業所を展開し、喫茶を中心に活動を行なっている。2017年に「生活介護」事業へ移行した。

〒241-0001
神奈川県横浜市旭区上白根町
891-18-4-103
TEL/FAX: 045-953-6666

かった絵や制作物を「すごい!」と評価してくれる人がいるのを見てもらう。そうすると、自分の考えの方が狭かったのだと気づき、こうしなくてはいけないという気持ちもほぐれていきます。お客さんとメンバーとのやり取りの見え方も変わっていくはずで、そのようにカブカブがやろうとしていることに得心してもらえると、共にこの場所を営むチームになっていけるのだと思います。

今後の課題は、メンバーそれぞれのパフォーマンスをもっと仕事にしていくことです。その人の面白さというものが伝わる仕事にしていきたいです。誰が作っても同じようなものではなく、「ノモトさんのバッグ」とかモノを介してその人をプレゼンしている感じをさらに進めて、モノにならない面白さも接客やら表現やらにつなげて稼いでもらいたい。そういう、人を発信するというのが、カブカブだけではなく、旭区内の他の事業所にも広まっている手応えがあるので、そこをもっと推し進めたいです。

福祉施設で障害のある人たちが「立派な人」にしていく、企業などへ就職できるようにきちんと訓練するというやり方は王道であって、多分なくならないでしょうが、そうでない流れがあるこ

ともカブカブでは示して、主流を揺さぶってみたいのです。それが世の中を多様にするってことですよ。

しかも、カブカブがすごいからできているのではなく、実際にやっていることを見てもらって、それがメンバーやスタッフ、働く人誰にとっても心地いいことをしているだけで、何ら特別なことではなく、真似できそうだと感じてもらえるよいなと思っています。

アートの活用法

私は演劇批評などのライター仕事もしていますが、ダンスや演劇の鑑賞と批評は、実践の場でとても有用だと思います。ほかの福祉施設でも、支援をどうするかとか直接的なところで煮詰まっていたら、何らかのアートに触れてみたいと思います。その一人一人の面白さから仕事を生み出すことのヒントをアートから見出すことができますし、「〇〇でなくてはならない」という窮屈な価値観を緩めて寛容にするきっかけも得られるでしょう。

ネットワークづくりについて

地域のネットワークづくりには力を入れています。顔の見える関係を作るというのは、何かあった時のための準備をすること。問題があった際に、培ってきた関係性に頼ることができます。頼るだけでなく、障害に関してはもちろんなのですが、貧困の問題でもジェンダーのことも、子どもでも外国籍の人でも、何か困ったことがあったらカブカブに駆け込めて、孤立せずに済む、そんな場所でありたいと思っています。頼りがいのある場であるためには、これまで以上にカブカブが色々なところとつながっていないといけません。

横浜では様々な問題に対応する相談窓口をたくさん作っている一方で、公助がどんどん減っていて、自助・共助として地域住民



工房では、オリジナルで作ったカブカブ音頭をひと踊り

に求めることが増えています。そのやり方には問題があると思っ
ていますが、ただ批判ばかりしてもしょうがないので、地域の一
員としてワイワイと共助を進めて、行政の人たちにも一緒にやり
たいと思わせちゃうくらいの魅力的なネットワークにしていけ
ばいいんじゃないかと思っています。カブカブのある旭区では、
2011年に40代の障害がある方の孤立死が起きてしまいました。
その方への応答としても、旭区で障害福祉に携わる私たちは
他人事ではなくネットワークづくりに取り組んでいるのです。

「自助/共助/公助」なんて枠を超えた「おせっかいとおたが
いさま」。例えば、大きな災害が起きたときに、事業所がすべ
てのメンバーを救出しなければという考えもあるでしょう。その責
任感は尊いと思いますが、限定し抱え込むような発想よりも、そ
んなネットワークを広げていって、メンバーがどこに住んでい
てもその地域で守られるというくらい隅々までつながってしまえば
いい、って夢みたいなきことを考えています。

でも、全国に何千もあるといううちの現場のたとえ1割でも、
アートの力を借りながら地域に働き掛けていったら、きっと世界
は変わりますよ。どうですか、ご一緒に？

